





			昭 20	昭 19	年
8	8	8	8	2	月
15	14	13	10	15	日
<p>戦況不利となり、海林より後退、横道河子に向かい徒步行軍中、第二中隊および海林出發</p> <p>同日横道河子着、戦況有利の情報により、再度海林に至り、同地南方地区の警備、同日十二時ごろ猛烈な空襲を受け生死不明者等をだした。</p>			<p>軍令陸甲第一号により編成下令</p> <p>牡丹江市（満第三三一部隊兵舎）において編成完結（常置員五名）</p> <p>警備召集下令、牡丹江市在住の在郷軍人を召集して編成</p>		<p>略</p> <p>歴</p>
<p>海林着、同地付近の警備、同日戦況不利の報により横道河子に向かい列車により海林出發</p> <p>同日より同地付近の警備</p> <p>海林に向かい牡丹江市出發</p> <p>編成</p> <p>大隊本部</p> <p>歩兵中隊……………四</p>			<p>摘要</p>		

## 特設警備第六五五大隊略歴

通称号 銳第三一六五部隊

2426

9	8	8	8	9	9	9	9	8	8	8
8	22	19	15	19	14	13	8	27	18	16
<p>び第四中隊は、部隊主力と別行動となった。</p> <p>部隊主力（本部、第一中隊、第三中隊）の行動</p> <p>早朝横道河子着、同夜さらに一面坡に向かい行動中、第三軍の命令により、横道河子に集結</p> <p>横道河子において武装解除、行軍により拉古に移動</p> <p>拉古において第六作業大隊に編入</p> <p>行軍により拉古出発</p> <p>綏芬河經由入「ソ」</p> <p>「グロデコ」着、同地より列車により、「ウスリー」地区に向かう。</p> <p>第五五七労働大隊として「ウスリー」地区収容所に入所</p> <p>第二中隊の行動</p> <p>海林出発後、部隊主力と別行動となり、新安鎮經由、横道河子方面に向かい行動</p> <p>「ロマノフカ」村（白系「ロシヤ人」部落）に到着、さらに行動続行</p> <p>冷山付近より老爺嶺山脈を踏破したが、多数の落伍者をだした。</p> <p>老爺嶺を踏破し、宝山鎮（森林鉄道、六十「キロ」）に至った際、「ソ」軍に遭遇し武装解除、徒步行軍により葦河に移動、同地より貨車により冷山に至</p>										

2427

	11	10	9	8	8	8	8	11	10	9	9
	29	25	3	24	22	20	15	15	25	15	7
	<p>る。</p> <p>横道河子着、同地より海林に移動</p> <p>中隊主力は海林において第一四四作業大隊に編入</p> <p>綏芬河經由入「ソ」</p> <p>「イズベスト・コワヤ」地区収容所に入所</p> <p>第四中隊の行動状況</p> <p>海林出發後部隊主力と別行動となり、林家屯——三道溝經由、行動間落伍者が続出した。</p> <p>高嶺子駅付近において「ソ」軍砲兵部隊（宿営中）と交戦後冷山に至る</p> <p>冷山において終戦を知り、武装解除</p> <p>海林着、同地の収容所に入所</p> <p>中隊主力は、第一四二作業大隊に編入</p> <p>綏芬河經由入「ソ」</p> <p>「ライチハ」地区収容所に入所</p> <p>大隊長</p> <p>中佐 沖 久 吉</p>										



至自							
10	10	8	8	8	10	10	9 8
22	18	21	17	12	14	1	27 1 25
<p>同地において武装解除</p> <p>同地編成の作業大隊（長、西村大佐）に編入</p> <p>綏化第二作業大隊に編成替えとなり黒河經由入「ソ」</p> <p>「クラスノヤルスク」収容所に入所</p> <p>第三中隊</p> <p>第一三四師団長の指揮下に松花江上、佳木斯——方正間の物資輸送の落備</p> <p>中隊は、中村少尉群（馬鞍山丸乗船）および福井少尉群（白玉山丸乗船）に別れて依蘭に向かい佳木斯を出発</p> <p>中村少尉群</p> <p>兵器、弾薬を伊漢通に輸送後、佳木斯に帰還途上、依蘭西方約五「キロ・メートル」付近においてソ軍江上艦隊と交戦し損害を受けた後対岸に上陸、以後陸路を行動</p> <p>大通河に到着、同地において武装解除。以後方正經由</p> <p>佳木斯に移動</p> <p>佳木斯において、木村作業大隊（長、大尉木村義己）に編入、同日出発入「ソ」</p> <p>「ハバロフスク」地区収容所に入所</p>							

2430

年		月		日		略	歴	摘要
昭	19	6	4	昭	20			
		10	19	12	15	19		
<p>通称号 満第六二九部隊 説第二六〇五部隊</p> <p>特設警備第六〇五大隊略歴</p> <p>軍令陸甲第四六号により編成下令  間島市旧歩兵第二四八連隊の兵舎において編成完結  その後間島市内在郷軍人に対し数回に亘り教育召集を実施、教育期間は毎回二週間乃至三週間  警備召集下令  間島において停戦  第三軍司令官の命令により部隊を解散  大隊長  中佐 米沢喜三郎</p>								

2431



昭 20		昭 19		年	第一二師団司令部略歴 通称号 満第七八六部隊 公第一三一八〇部隊 公第二〇三一一五部隊
8 8		8 8		月	
81 18		16 15		日	
昭20年8月8日		昭19年8月16日		略	軍令陸甲第八二号により編成下令 間島省琿春において編成完結 （昭和十九年七月沖縄、宮古島に転用した第二八師団の残置者を基幹人員とし、在満各部隊からの転入者をもつて竜江省齊々哈爾において編成に着手し、八月七日間島省琿春に移駐） 同日より同地付近の整備 琿春南方高地の陣地構築 日「ソ」開戦により構築中の陣地（小盤嶺）に移動 小盤嶺において停戦 同地において司令官、自決し、琿春付近において参謀長自決、なお兵器部職員全員も自決した。 琿春県密江峠に集結、武装解除をうけ琿春飛行場に収容 金蒼収容所に移動
昭20年8月18日		昭19年8月15日		歴	
					摘要

2432

	12	11	10	9	10	9	9
	1	11	20	20	22	17	15
	<p>主力は金蒼第五七作業大隊（大尉 久田見 環）に編入  金蒼出発  「ソ」満国境珥春經由入「ソ」</p> <p>将校は金蒼收容所出発、同日間島将校收容所に收容  間島将校第二作業大隊（大佐 品部孝晴）に編入  間島出発  「ソ」満国境珥春經由入「ソ」</p> <p>司令官  中尉 中村 次 喜 蔵</p>						

2433

昭 20		昭 19	
8	8 5	8 7	8 7
15	9 10	15 12	15 12
<p>現地応召者の編入</p> <p>日「ソ」開戦にともない中崗子にあつた主力は十里坪、北荒嶺、中崗子西方の守備</p> <p>春化残留隊は「ソ」軍の進入にともない十里坪の主力陣地に追及すべく行動途中</p> <p>「ソ」軍の攻撃をうけ、一部は分散自由行動をとる</p> <p>中崗子にあつた一部は密江屯に移動</p>		<p>軍令陸甲第八二号により編成下令</p> <p>北安省嫩江において編成完結</p> <p>(昭和十九年七月沖繩宮古島に転用した歩兵第三〇連隊の残置者を基幹人員とし、在滿各部隊からの転入者をもつて編成)</p> <p>間島省琿春県春化(土門子)に移駐</p> <p>同日より同地付近の国境警備</p> <p>主力は中崗子に移駐、陣地構築</p> <p>第一大隊は春化に残留、国境警備</p>	
		略	
		歴	
		摘要	

## 歩兵第二四六連隊略歴

通称号 公第一三一二〇部隊  
公第二〇三二〇部隊

2434

至自											
11	11	10	10	9	9	8	8	8	8	8	8
7	8	20	5	2	17	17	29	25	24	23	19
<p>密江峠において武装解除をうけ金倉収容所に収容、後日収容所において連隊主力と合流した。</p> <p>中岡子の主力は中岡子出発同日十里坪の連隊本部に合流</p> <p>春化残留隊の大部は十里坪の連隊主力に合流北荒嶺の部隊も主力の武装解除までに合流した。</p> <p>現地応召者の大部の者は部隊と別行動となり応召前の住所および北鮮に向け出発した。</p> <p>珥春県十里坪において武装解除をうけ金倉収容所に収容</p> <p>金倉第五一作業大隊（大尉 崗 克己）に編入</p> <p>金倉第五七作業大隊（大尉 久田見 環）に編入</p> <p>金倉収容所出発</p> <p>「ソ」満国境珥春經由入「ソ」</p> <p>得校は間島得校第一作業大隊（大佐 谷 岩藏）に編入</p> <p>間島収容所出発</p> <p>「ソ」満国境満州里經由入「ソ」</p> <p>連隊長</p> <p>大佐 山本 稜 威</p>											

2435

昭 20		昭 19		年 月 日	略 歴	摘 要	
5 下旬	5 18	8 下旬	8 7 15 12				
<p>現地応召者編入 連隊の主力陣地を小盤嶺に構築のため一部を国境警備に残し、主力をこれにあ てる。</p>				<p>軍令陸甲串八二号により編成下令 哈爾濱孫家において編成完結 （昭和十九年七月沖繩宮古島に転用した歩兵第三連隊の残置者を基幹人員と し、在満各隊からの転入者をもつて編成され、八月十一日頃より逐次間島 省瑯春に移駐） 瑯春に移駐完了 国境警備および陣地構築 （歩兵第八八連隊（満第七二八部隊）が佳木斯に移駐後の兵舎に移りその任 務を継承 馬滴達、石磊子山、大荒溝、岩山等の陣地の警備</p>			

歩兵第二四七連隊略歴

通称号 公第一三一二五部隊  
公第二〇三二五部隊

2436

至自 至自 至自										
10	9	9	0	9	8	12	11	10	8	8 8 8
7	22	20	18	2	24	1	11	20	下旬	18 17 9
<p>日「ソ」開戦にともない各陣地の守備隊は小盤嶺の主陣地に後退          琿春および密江峠において武装解除、同日琿春飛行場に収容          金蒼収容所に移動、将校、下士官兵に区分され将校は間島収容所に収容          間島将校第二作業大隊（大佐 品部孝晴）に編入          間島出発</p> <p>「ソ」満国境琿春經由入「ソ」          主力は 金蒼第五二作業大隊（大尉古川又十郎）          金蒼第五三作業大隊（大尉尾形忠行）に編入          金蒼出発</p> <p>「ソ」満国境琿春經由入「ソ」          連隊長          大佐 西崎逸雄</p>										

2437

至自	昭	昭	年
	20	19	年
8 8 8	5 5	8 8	月
20 18 9	19	27 25	日
<b>歩兵第二四八連隊略歴</b> 通称号 公第一三一二八部隊 公第一三〇二八部隊			
<b>略 歴</b>			
<p>軍令陸甲第八二号により編成下令            竜江省齊々哈爾において編成完結            (昭和十九年七月神羅宮古島に転用した歩兵第三六連隊の残置者を基幹人員とし、在滿各隊からの転入者をもつて編成)            同日より同地付近の警備            移駐のため齊々哈爾出發            間島省間島(延吉)に到着、同日より同地付近の警備            主力は図們に移駐し、同地付近の陣地構築、一部は間島に残留            現地応召者編入            主力の一部は、日「ソ」開戦にともない琿春県密江屯、汪清県三道溝に前進し、停戦により各駐屯地において部隊を解散し、小グループに別れ、その大部は、間島、明月溝に或は北鮮を目標して行動したが、現地応召者は応召前の住所に向って行動した。</p>			
<b>摘 要</b>			

2438

		9	9	8	8
		8	2	20	17
		<p>図們において武装解除をうけた者は、九月二日間島収容所に収容</p> <p>間島残留隊は間島において武装解除</p> <p>間島収容所に収容されたものの主力は八月二十七日間島第二五作業大隊（属枝、梅田歳一）に編入</p> <p>間島出発</p> <p>「ソ」満国境珲春經由入「ソ」</p> <p>その他の者も間島各作業大隊に編入され珲春經由入「ソ」</p> <p>連隊長</p> <p>大佐 広瀬利善</p>			

2439



										昭 20	年			
										7	7	月		
										30	10	日		
10	9	9		8	8	8	8	8	8	8	7	7		
8	19	18		18	17	16	15	12	9	30	10			
<p>第一一二師団挺進大隊略歴</p> <p>通称号 公第二〇三五部隊</p> <p>略歴</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令        琿春において編成完結        同日より同地付近の警備        日「ソ」開戦にともない中崗子、大荒溝方面、馬滴達、三道溝、琿春北側高地        等の陣地に分散配備        各隊は密江屯陣地に転進、一部は現地に残留        密江峠において戦闘中の師団工兵隊、独立臼砲第一中隊を併せ指揮        密江峠において「ソ」軍と交戦        主力は密江峠において武装解除        琿春飛行場に收容された。        その主力は金蒼第五五作業大隊（大尉千田義勝）に編入        金蒼出発        「ソ」満国境琿春經由入「ソ」</p>													摘要	

2440

至自 至 自				至自			
10	9	9	9	8	10	9	8
25	23	2	1	18	1	27	19 24
<p>又若干のものは、主力とはなれ北鮮に入り、古茂山収容所に収容された。</p> <p>隊長 少佐 佐野隆夫</p>				<p>一部は金蒼第五六作業大隊（中尉竹下百馬）に編入</p> <p>金蒼出発</p> <p>「ソ」満国境琿春經由入「ソ」</p> <p>一部は密江屯に集結することなく分散行動し、間島方面に向かいその後横道河子、十里坪間島等でそれぞれ武装解除をうけ、その大部は間島収容所に収容</p> <p>間島第二九作業大隊（少尉大槻春夫）</p> <p>間島第三〇作業大隊（中尉鈴木）に編入</p> <p>間島出発</p> <p>「ソ」満国境琿春經由入「ソ」</p>			

2441

昭 19	年	昭 20	至	日	略	略
8	7	7	5	5	4	9
8	7	9	8			
9	10	19	9	22	16	15
9	12					
<p>野砲兵第一一二連隊略歴</p> <p>通称号 満第二一二部隊 公第一三一三六部隊 公第二〇三三六部隊</p> <p>軍令陸甲第八二号により第一一二師団砲兵隊編成下令 竜江省齊々哈爾において編成完結</p> <p>(昭和十九年七月沖繩宮古島に転用した野砲兵第二八連隊の残置者を基幹人員とし、在満の他部隊からの転入者をもつて編成)</p> <p>編成完結直後より逐次間島省琿春に移駐同地の警備</p> <p>主力は密江屯において陣地構築</p> <p>一部(第二大隊)は図們において陣地構築</p> <p>塚本少佐着任</p> <p>現地応召者の編入</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により野砲兵第一一二連隊編成下令</p> <p>琿春において編成完結</p> <p>(第一一二師団砲兵隊を改称)</p> <p>日ソ開戦にともない図們に在つた第二大隊は、密江屯の部隊主力陣地へ前進</p>						
						摘要

2442

	10	9	9	8	109	9	9	8	8	
	1	27	19	24	7	22	18	2	29	18
密江峠において武了解除										
金倉収容所に収容										
主力は金倉第五三作業大隊（大尉尾形忠行）に編入										
金倉出発										
「ソ」満国境琿春經由入「ソ」										
一部は金倉第五六作業大隊（中尉竹下百馬）に編入										
金倉出発										
「ソ」満国境琿春經由入「ソ」										
連隊長										
初代 少佐 岡崎 利行										
二代 少佐 塚本 清太郎										

年		月		日		略	歴	摘要
昭	19	8	7	8	7			
昭	20	8	8	7	5	5	8	8
		12	9	末	19		25	23
							15	12
<p>第一一二師団工兵隊略歴</p> <p>通称号 公第一三三一部隊 公第二三〇三一部隊</p> <p>軍令陸甲第八二号により編成下令 竜江省齊々哈爾において編成完結 （昭和十九年七月沖繩宮古島に転用した工兵第二八連隊の残置者を基幹人員として編成） 移駐のため齊々哈爾出発 間島省琿春着 同日より同地付近の警備 主力は密江屯に移駐陣地構築 一部は琿春に残留 現地応召者編入 一部を密江屯に残置し主力は明月溝に転進 明月溝において日「ソ」開戦 明月溝出発、一部明月溝に残置</p>								

2444



昭										昭		年	月	日	略	歴	摘要
20										19							
9	9	8	8	8	5	8	8	8	7	15	12						
17	17	30	18	9	19	25	23	15	12	軍令陸甲第八二号により編成下令 竜江省齊々哈爾において編成完結 （昭和十九年七月沖繩宮古島に転用した第二八師団通信隊の残置者を基幹人員として編成） 移駐のため齊々哈爾出發 間島省琿春着同日より同地付近の警備 現地応召者編入 日「ソ」開戦のため密江屯陣地に移動し師団司令部と各部隊間の通信連絡 密江峠において武装解除後琿春飛行場に集結 金倉収容所に収容 金倉第五七作業大隊（大尉 久保田環）に編入 金倉出發							

## 第一一二師団通信隊略歴

通称号

公第一三一五部隊  
公第二〇三一六部隊

2446

26402

	至自
	109
	221
	「ソ」満国境彈春經由入「ソ」 隊長 大尉 戸倉武人

2447



昭		昭		昭		年 月 日	略 歴	摘要			
20		20		19							
8	8	8	7	5	4				8	8	8
24	18	9	19	25	23	15	12				
<p>軍令陸甲第八二号により編成下令            竜江省齊々哈爾において編成完結            (昭和十九年七月沖繩宮古島に転用した輜重第二八連隊残置者と独立自動車            第八二大隊よりの転入者を基幹人員とし、在滿他部隊よりの編入者をもつ            て編成)</p>		<p>多駐のため齊々哈爾出発            間島省琿春着、同日より同地付近の警備</p>		<p>第一二七師団輜重隊の編成を担当            現地応召者の編入</p>		<p>第一三九師団輜重隊の編成を担当            日「ソ」開戦にともない密江屯の陣地に配備            密江屯において武装解除後琿春飛行場に集結            琿春出発金蒼收容所に收容、金蒼第五六作業大隊(中尉竹下百馬)に編入</p>					

## 第一一二師団輜重隊略歴

通称号 公第一三一七部隊  
 公第二〇三二七部隊

2448

26502

10 9 9

1 27 19

金蒼出發

「ソ」満国境彈春經由入「ソ」

隊長

少佐 武内 借雲

2449

						昭	昭	年 月 日
						20	19	
10	9	8	8	8	6	5	7	
1	27	19	24	16	9	12	12	略
<p>「ソ」満国境 珥春經由、入「ソ」</p> <p>金蒼出発</p> <p>珥春出発、金蒼着、金蒼第五六作業大隊（中尉竹下百馬）に編入</p> <p>密江屯において武装解除をうけ、珥春飛行場に収容</p> <p>道称号公第二〇三六六部隊を使用</p> <p>日「ソ」開戦にともない密江屯陣地に配備</p> <p>（第一一二師団司令部兵器修理班の人員を基幹とし、現地応召者をもつて編成）</p> <p>間島省珥春において編成完結</p> <p>（第一一二師団司令部兵器修理班として業務を遂行）</p> <p>軍令陸中第八二号により編成下令</p>						略		
								歴
								摘要

## 第一一二師団兵器勤務隊略歴

通称号  
公第一二九六二部隊  
公第一二九六八部隊  
公第二〇三六六部隊

2450

26602

隊長  
中尉 長谷川哲

2451

至 自		昭 20	昭 19	年 月 日	略 歴	第一二師団病馬廠略歴 通称号 公第一二九六六部隊 公第二〇三六六部隊					
		5	7								
		11	12								
10	9	9	8	8	8	6	5	7	11	12	軍令陸甲第八二号により編成下令 間島省琿春において編成完結 (現地応召者をもつて編成) 以降より通称号公第二〇三六六部隊使用 日「ソ」開戦により密江屯陣地に配備 密江峠において武装解除をうけ琿春飛行場に收容 金蒼に移動し、金蒼第五六作業大隊(中尉竹下百馬)に編入 金蒼出発 「ソ」満国境琿春經由入「ソ」 廠長 獣医大尉 田上 実
										摘要	

2452



至自 至自					至自					
11	11	10	9	9	9	9	8	8	8	
7	3	20	25	20	16	13	28	27	18	24
<p>満州里經由入「ソ」</p> <p>同地出発</p> <p>同地出発</p> <p>輝春經由入「ソ」</p> <p>将校は間島将校第一大隊（大佐 谷 岩蔵）に編入</p> <p>司令官</p> <p>中尉 古賀 竜太郎</p>					<p>同地出発</p> <p>第二三作業大隊（見士 中岡 隆）</p> <p>第二二作業大隊（見士 白水 浩）</p> <p>第一〇作業大隊（中尉 岸川 安蔵）</p> <p>間島第一作業大隊（少尉 石川 金重）</p> <p>下士官、兵は</p> <p>司令官、副官、当番兵は飛行機で入「ソ」</p> <p>後間島収容所に収容</p> <p>間島残留隊は師団各部隊よりの連絡員等を掌握約七〇名同地において武装解除</p> <p>将校と下士官兵に分離</p>					
					に編入					

至自	昭 20	年	歩兵第二八〇連隊略歴
8 8 8 5	3 1	月	
18 9 8 22	20 16	日	
<p>方に転進</p> <p>日「ソ」開戦にともない「ソ」軍の攻撃を受け各陣地において戦闘を交え逐次後</p> <p>夜半五家子の兵舎に対し「ソ」軍の砲撃あり</p> <p>内地および在満応召者入隊約一三五五名編入</p> <p>又一部道路建設のため延吉県八道河に派遣</p> <p>第三大隊は朝鮮成鏡北道慶源付近の警備のため派遣</p> <p>嶺山、南頭山、鉄壁山等の陣地構築および警備</p> <p>主力をもつて東部「ソ」満国境最右翼に位置し五家子山、義勇治、水流峯、五</p> <p>同日より同地付近の国境警備</p> <p>転入者をもつて編成、当時の充足人員約一四五〇名</p> <p>（第九国境守備隊歩兵中隊よりの編入者を基幹とし、その他在満各隊からの</p> <p>間島省琿春県五家子において編成完結</p> <p>軍令陸甲第九号により編成下令</p>	略	略	略
			摘要

2455





昭 20			自昭 21 20		昭 20		自昭 21				
8	8	8	7	7 8	8	6	6	5 12	8	8	8
18	15	9	4	3 27	下旬	19	15	中旬	下旬	21	20
<p>部隊主力の転進掩護のため主力より一日おくれ上角山南麓において武装解除                  朝鮮古茂山収容所に入所                  大隊主力は古茂山第八作業大隊(中尉 高倉文二)に編入                  朝鮮清津、羅津において労役に従事                  古茂山出發                  興南經由入「ソ」                  一部のものは古茂山より間島収容所に収容され部隊主力と同様間島編成の作業                  大隊に分散編入されている。                  又他の一部のもの(約九〇名)は古茂山、間島、北安、哈爾濱の各収容所に移                  動                  哈爾濱において解放され「コロ」島經由帰還                  延吉興八通河派遣隊                  日「ソ」開戦                  朝鮮阿吾地に向かい八道河出發                  一里洞付近において「ソ」軍の攻撃を受けて四散                  連隊長                  大佐 伊 從 秀 夫</p>											

2457

昭和20年		略	歴	摘要
月	日			
3	1	軍令陸甲第九号により編成下令		
8	16	間島省延吉県間島（延吉）において編成 歩兵第二四六連隊 歩兵第二四七連隊 歩兵第二四八連隊 よりの転入者を基幹として編成		
5	20	同日より同地付近の警備		
		上旬旬主力はつぎのように各地において陣地構築		
		第一大隊……（除第一中隊朝鮮咸鏡北道訓成付近		
		第二大隊……… 慶源付近		
		第三大隊……… 間島省延吉県八道河付近		
		第一中隊……… 三合村付近		
		一部は間島に残留、同地の警備		
		（大谷准尉以下約二〇〇名）		

歩兵第二八一連隊略歴

通称号 満第六四六部隊  
英邁第一五二六六部隊

至自										至自				
20										7	76	6	5	5
10999	998	8	8	8	8	8	8	7	76	6	5	5		
2014	142	1327	2021	19	17	16	9	2223	205	中旬	下旬	22		
<p>現地応召、入隊者約七〇〇名編入</p> <p>訓戒、慶源付近の陣地は第七九師団に引継ぎつぎのとおり移駐陣地構築</p> <p>第一大隊 …………… 間島省延吉県開山屯付近</p> <p>第二大隊 …………… 中国師岑</p> <p>第一大隊は開山屯地区を歩兵第二八二連隊に引継ぎ八道河に移駐し陣地構築</p> <p>朝鮮人応召者約二〇〇名編入</p> <p>現地応召者の編入</p> <p>日「ソ」開戦にともない、主力は間島北方に云進準備</p> <p>現在の各陣地は第二大隊が守備を担任</p> <p>主力は兄弟峯南側に集結、中坪（間島北方）に転進</p> <p>間島において武装解除をうけ、間島収容所に収容</p> <p>朝鮮人は解放</p> <p>間島残留隊は同地において武装解除をうけ間島収容所に収容</p> <p>第二大隊は各陣地において武装解除をうけ間島収容所に収容</p> <p>間島作業大隊（各作業大隊に分散）に編入</p> <p>同地出発</p> <p>琿春經由入「ソ」</p>														

至自		昭					
		21					
6 6	5	2	12	9	8	8	8
23 7	31	4	14	10	16	15	9
<p>第一中隊の行動</p> <p>三合村に在りし第一中隊は日「ソ」開戦にともない連隊長の指揮下をはなれ、混成第一〇一連隊長の指揮下に入る</p> <p>同地において停戦</p> <p>同地において部隊解散し北鮮又は青州に向け自由行動となり、帰還したのもあるが北鮮に入った者の大多数は、八月末日に古茂山収容所に収容</p> <p>富寧収容所に移動</p> <p>羅津港において「ソ」軍の労役に従事</p> <p>古茂山収容所に収容</p> <p>古茂山第三作業大隊に編入、同地出発</p> <p>興南經由入「ソ」</p> <p>連隊長</p> <p>大佐 高畑洋平</p>							

2460

至自				昭 20			年 月 日	略 歴
9	8	8	8 8	7	7	1		
9	24	28	1817 9	30	10	16		
<p>軍令陸甲第九号により編成下令 軍令陸甲第一〇六号により編成下令 間島省延吉県開山屯において編成完結</p> <p>独立歩兵第二六九大隊 独立歩兵第二七〇大隊 よりの転入者（部隊復帰）</p> <p>および歩兵第二八一連隊よりの転入者を基幹とし、現地応召者をもつて編成</p> <p>同日より同地付近の陣地構築、ならびに警備</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>同地において武装解除</p> <p>主力は同地出發</p> <p>間島収容所に収容</p> <p>将校と下士官、兵に別れる</p> <p>下士官兵は間島第一九作業大隊（准、平野重作）に編入</p>								
							摘 要	

2461

昭							至自		
21									
6	6	5	9	8	8	11	10	9	9
11	7	80	上旬	28	18	2	1	10	18
<p> 同地出発  瑛春経由入「ソ」  一部は間島作業大隊（各隊に分散）に編入  瑛春経由入「ソ」  将校は同地出発  満洲里経由入「ソ」  開山屯武装解除者の一部  開山屯において武装解除  朝鮮古茂山収容所に収容  古茂山第三作業大隊（大尉 俵本正三）に編入  同地出発  興南着  興南より船により入「ソ」  連隊長  大佐 友枝 敬一 </p>									

2462

昭和20年							略歴
年月日							
8	8	8	8	8	7	7	
19	16	15	11	9	30	10	<p>第一二七師団挺進大隊略歴</p> <p>通称号 英邁第一五二七六部隊</p>
<p>同日より同地付近の警備</p> <p>同日より同地付近の警備</p> <p>日「ソ」開戦にともない一部を残務整理のため間島に残し、主力は八道河に移駐のため同夜出発</p> <p>延吉県八道河に到着後つぎのとおり分散配置</p> <p>第二中隊……………延吉県八道河</p> <p>本部・第一中隊……………朝鮮上三峯</p> <p>第三中隊……………朝鮮鐘城</p> <p>停戦</p> <p>朝鮮、上三峯・鐘城にあつた本部・第一部隊、第三中隊は延吉県開山屯において合流し、後八道河において部隊集結</p> <p>同地において武装解除</p>							
							摘要





昭和20年		略	歴	摘要
月	日			
7	1			
6	同	5	22	10
7	10	6	同	5
10	10	22	20	16

軍令陸甲第九号により第一二七師団砲兵隊編成下令  
間島省琿春県琿春において編成完結  
第九国境守備隊砲兵隊および第一一二師団砲兵隊よりの転入者を基幹として編成  
同日より同地付近の国境警備  
在満の応召、入隊者約四〇〇名編入  
第一国境守備隊より約六五〇名編入  
つぎのとおり分散配備

主 力  
 第二中隊一ヶ小隊 …… 朝鮮会軍  
 第四中隊 …… 琿春に残留（歩兵第二八〇連隊  
 第二大隊長の指揮下に入る）  
 第九中隊一ヶ小隊 …… 延吉県間島  
 軍令陸甲第一〇六号により野砲兵第一二七連隊編成下令

野砲兵第一二七連隊略歴

通称号 満第三三〇部隊  
英邁第一五二六八部隊

2465

至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自
109	99	99	8	8	8	8	8	8	7	7	7
2520	1513	73	21	20	16	10	11	9	30		下旬
<p>在満応召者の編入  朝鮮人約 名編入  編成完結  (第一二七師団砲兵隊を改称)  各駐屯地において日「ソ」開戦  琿春残留隊は同地において「ソ」軍と交戦後東作山に転進  白石屯で武装解除をうけ間島収容所に収容  主力は八道河および間島において武装解除  間島収容所に収容  主は間島第三、第一〇、第一四作業大隊に編入  同地出発  琿春終由入「ソ」  連隊長  大佐 齊藤実明</p>											

昭 20		年		月		日	
8	7	5	4	3	1	16	1
9	以降	下旬	22	20	20	20	16
第一二七師団工兵隊略歴							
通称号 満第九九八部隊 英邁第一五二六九部隊 英邁第一五二六九部隊							
略 歴							
<p>軍令陸甲第九号により編成下令          間島省琿春県琿春において編成完結          (第九国境守備隊工兵隊、および第一一二師団工兵隊よりの転入者を基幹として編成)          同日より同地の警備          延吉県図們に移駐同地の警備          在満の応召者約二五〇名編入          主力は八道河に移駐陣地構築          一部は明月溝、和竜、開山屯等に分散配備          朝鮮人約六〇名編入          英邁第一五二六九部隊の通称号を使用          日「ソ」開戦にともない全力を八道河に集結陣地構築ならびに橋梁爆破の準備          中</p>							
摘 要							

2467



										年	
										昭 20	
										月	
8	8	7	7		6	6	5	5	8	1	日
15	9	22		10	上旬	下旬	22		20	16	
<p>第一二七師団通信隊略歴</p> <p>通称号 満第六一〇部隊 英邁第一五二七二部隊</p> <p>略 歴</p> <p>軍令陸甲第九号により編成下令 間島省無吉嶽間島において編成完結 (第一一二師団通信隊よりの転入者を基幹とし、編成約一一〇名) 同日より同地の警備 現地応召者約六〇名編入 一部八道河に移駐陣地構築 朝鮮人二二名編入 主力をもつて八道河に移駐陣地構築 一部は間島に残留 英邁第一五二七二部隊の通称号を使用 現地召集者若干名編入 日「ソ」開戦 間島残留隊は同地出発</p>											
<p>摘要</p>											

2469



昭 20		年		月		日		略 歴	摘要
8	8	7	6	5	3	1	20		
15	9			22					
<p>軍令陸甲第九号により編成下令          間島省琿春県琿春において編成完結          第一一二帰国輜重隊、独立自動車第六六、第六七各大隊よりの転入者を基幹として編成          同日より同地において歩兵第二八〇連隊の陣地構築の資材輸送          現地応召者約三〇〇名編入          主力は延吉県竜井および一部を大拉子に移駐          第一中隊の主力は琿春に残留          各駐屯地において師団各隊の資材輸送          朝鮮人兵約一七〇名の編入          日「ソ」開戦にともない八道河子に遂次移駐し八月十三日より主力をもつて弾薬の輸送          一部は会寧方面に人員の輸送</p>									

## 第一二七師団輜重隊略歴

通称号 満第一二四部隊  
 英邁第一五二七三部隊

2471



	11	10	9	9	8	8	8	8
	3	20	13 14	8	24	20	18	17
			満洲里經由入「ソ」	下士官兵 間島第一一作業大隊（少尉 清水正夫）	將校、下士官兵に区分されそれぞれ間島收容所に收容	隊長は単独にて間島收容所に收容される。	在滿召集者および朝鮮人は自由行動	八道河において武装解除
			隊長 少佐 佐伯久一	間島第一〇作業大隊（中尉 岸川文蔵） に編入				
			將校は將校第一大隊（大佐 谷岩蔵）に編入					
			瑯春經由入「ソ」					

						昭 20	年	
8	8	8	8	8	6	5	月	
17	20	18	15	9	20	31	日	
<p>間島省延吉県間島において編成完結                      (昭和二十年三月二十日第一二七師団編成と同時に重砲第二連隊、独立重砲第七大隊よりの転入者をもつて兵器勤務班を編成した。この兵器勤務班を基幹として歩兵第二八〇連隊および歩兵第二八一連隊よりの転入者をもつて編成)</p> <p>同日より同地において勤務</p> <p>主力は延吉県八道河に移駐、陣地構築</p> <p>森川伍長以下七・八名間島に残留</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>停戦</p> <p>主力は八道河において武装解除</p> <p>間島収容所に収容</p> <p>間島残留隊は同地において武装解除</p>						<p>軍令陸甲第七五号により編成下令</p>		略
						<p>間島省延吉県間島において編成完結</p>		歴
						摘要		

第一二七師団兵器勤務隊略歴

通称号  
 英邁第一三九六三部隊  
 英邁第一三九九四部隊

